

2022 AC

1st. Celebrate Sukkot

原語で味わう創世記第1章

集中特別講座 10/9~16

11日(夜) No.5

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

①ヨハネの福音書5章39節

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証ししているものです。

【新改訳2017】

②イザヤ書 46章10節

わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。

※聖書のシナリオライターは時間と空間に支配されない永遠の神です。シナリオが歴史の中に突入する時、その初めと終わりが規定されることは当然のことです。

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

③イザヤ書34章16節

【主】の書物を調べて読め。
これらのもののうち、どれも失われていない。
それぞれ自分の伴侶を欠くものはない。
それは、主の口がこれを命じ、
主の御霊がこれらを集めたからである。

※「自分の伴侶」にたとえられているのは、神のみことばの証言が必ず伴侶のように置かれているということの意味します。例えば、「千年」「十四万四千人」など。

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

●創世記1章に関する注解書は多く書かれていますが、その多くが宇宙(地球)の始まりと考えています。しかしアシュレークラスでは、創世記1章を「**神の永遠のご計画の全貌が啓示されている章**」という視点で学んで行きます。

【新改訳2017】ヘブル人への手紙 4章12節

神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、**たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。**

●私たちが持っている「理解の型紙」(この世の知恵、常識、教理)という眼鏡を外して、霊を働かせることが不可欠です(Ⅱコリ5:16, 3:6)。私たちの霊の目が開かれるよう、シエーム・イエシュアの名を呼びつつ、学んで行きたいと思います。

1. 5節のテキスト

- 今回は5節のみを取り上げます。

【新改訳2017】

神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。
夕があり、朝があった。第一日。

ラーイラー カーラー ヴェラホーシェフ ヨーム ラーオール エローヒーム ヴァツィクラ

וַיִּקְרָא אֱלֹהִים לְאֹר לְיוֹם וְלַחֹשֶׁךְ קָרָא לַיְלָה
夜 名づけられた 闇を かつ 昼 光を 神は 名づけられたそして

エハード ヨーム ヴァイエヒーヴォーケル ヴァイエヒーエレブ

וַיְהִי־עֶרֶב וַיְהִי־בֹקֶר יוֹם אֶחָד׃
-一つの 日 朝が あったかつ 夕が あったそして

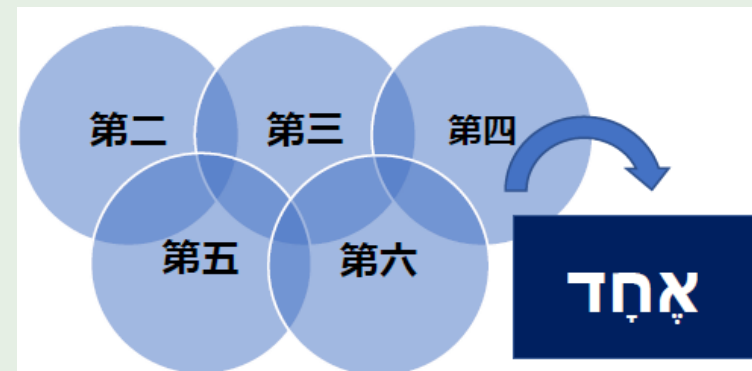
- この節には、以下の三つの事柄が記されています。

- (1) 「神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた」こと。
- (2) 「夕があり、朝があった」こと。
- (3) 「第一日」とあること。

2. 「第一日」の意味

● 「第一日」と訳されていますが、原文は「**ヨーム・エハード**」(תּוֹמַת הַיּוֹם)です。つまり「一つの日」という意味です。創世記1章では「第一日」から「第六日」までありますが、第一日以外はすべて序数となっています。しかし「第一日」だけは「一つの日」となっているのです。なぜその日だけ序数ではないのでしょうか。もし、序数であるならば「ヨーム・リシヨン」(יְשִׁמְרֵנוּ הַיּוֹם)となるはずですが、そうはなっていません。最初の日がthe first dayではなく「一つ」を意味する**One day**なのです。光が「昼」であり、かつ神の救いが「夕があり、朝があった」というリズムを持っていることから、「ヨーム・エハード」が神の創造における「一つの括り」を意味する語彙だと理解できるのです。

● 「**一つの括り**」(=エハード・フォルダ)の中に第二、第三・・・第六の救いのヨームがあるのです。神の創造においては不変の真理なのです。



3. 「光を昼、闇を夜」 ①

- 神が「光」と「闇」を、それぞれ「昼」と「夜」とに名づけられたとはどういう意味でしょうか。「名づける」(מִקְרָא)とは、名づけたものを「支配する」ことを意味しています。創世記2章20節の「人はすべての家畜、空の鳥、すべての野の獣に名をつけた。・・・」を参照。
- 「光」が光源としての光でないとするなら、光を昼と名づけたとしても、それは私たちが考える「昼」とは異なります。また「闇」を「夜」と名づけたとしても同様です。それは目には見えない「昼」であり、「夜」なのです。つまり、霊的な昼と夜を意味しているのです。このことについてイエシュア自身が解釈している箇所を見てみましょう。

3. 「光を昼、闇を夜」 ②

【新改訳2017】ヨハネの福音書9章1～7節

- 1 さて、イエスは通りすがりに、生まれたときから目の見えない人をご覧になった。
- 2 弟子たちはイエスに尋ねた。「先生。この人が盲目で生まれたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。両親ですか。」
- 3 イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。この人に神のわざが現れるためです。
- 4 わたしたちは、わたしを遣わされた方のわざを、**昼**のうちに行わなければなりません。だれも働くことができない**夜**が来ます。
- 5 わたしが世にいる間は、わたしが世の光です。」
- 6 イエスはこう言ってから、地面に唾をして、その唾で泥を作られた。そして、その泥を彼の目に塗って、
- 7 「行って、シロアム（訳すと、遣わされた者=メシア）の池で洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗った。すると、見えるようになり、帰って行った。

泥=土+唾

(ミングリング)

土は人を意味し、唾はイエシュアの口から出る「霊であり、いのちであるみことば」を意味します。泥を目に塗るという行為は、いのちを与える御霊が人の霊の中に入ることによって実現する予表的行為と言えます。

3. 「光を昼、闇を夜」 ③

●この箇所、イエシュアは「**昼**」と「**夜**」ということばを語っています。この話の文脈は、「生まれたときから目の見えない人」を見た弟子たちがイエシュアに質問した場面です。「先生。この人が盲目で生まれたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。両親ですか」。するとイエシュアは、「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。この人に神のわざが現れるためです」と答えます。そして、この人に神のわざが現わされることが「**昼**」だと説明します。反対に、「**夜**」は神のみわざが現わされない「**盲目の状態**」だと理解できます。これは、御子イエシュアによる創世記1章5節のすばらしい注解だと言えないでしょうか。

●夜イエシュアのもとにやってきたニコデモは、イエシュアの言われることを理解できませんでした。彼が「**闇**」の中にいたからであり、盲目でもあったからです。しかも彼は「**夜のイエシュア**」しか見てはいません。つまり肉の目を見たものしか、見ていなかったということです。彼はラビ(すなわち律法の教師)ですが、「**まことの光**」を知らずにいたのです。その箇所を見てみましょう。

3. 「光を昼、闇を夜」 ④

【新改訳2017】ヨハネの福音書3章1～6節

1 さて、パリサイ人の一人で、ニコデモという名の人がいた。ユダヤ人の議員であった。

2 この人が、夜、イエスのもとに来て言った。

「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられなければ、あなたがなさっているこのようなしるしは、だれも行うことができません。」

3 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに言います。

人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

4 ニコデモはイエスに言った。

「人は、老いていながら、どうやって生まれることができますか。

もう一度、母の胎に入って生まれることなどできるでしょうか。」

5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに言います。

人は、水と御霊によって(=から)生まれなければ、神の国に入ることはできません。

6 **肉によって(=から)生まれた者は肉です。御霊によって(=から)生まれた者は霊です。**

3. 「光を昼、闇を夜」 ⑤

●第二回目の講義で、「人は、水と御霊によって生まれなければ」という部分の「～によって」を「から」と訳すべきだと言いました。なぜなら、原文では「エク」(ἐκ/ἵνα) となっているからです。「水と霊」が一つの組み合わせで記されている箇所は創世記1章2節です。そこでは「神の霊がその水の面を動いていた」とあり、その二つが「ミングリング」(混ざり合うこと) することなく、霊が水の上を「ホバリング」している状態です。地にある水が「トーフー・ヴァーヴォーフー」の状態から、霊と「ミングリング」することが神の創造なのです。闇の中から呼び出された光(イエシュア)がそれを実現するのです。

●もし「人は、水と御霊によって生まれなければ」を「～によって」と解釈するとすれば、もう一つの「水と霊」が組み合わせられている箇所を見なければなりません。その箇所はエゼキエル書36章です。そこには「きよい水」と「新しい霊」によってなされる神の創造のわざが記されています。いずれも、水である神のことばと御霊による新しい創造が語られています。ちなみに、そこでもイエシュアの人性の「血」は隠されています。

3. 「光を昼、闇を夜」 ⑥

【新改訳2017】エゼキエル書36章22, 25~28節

- 22 それゆえ、イスラエルの家と言え。【神】である主はこう言われる。
イスラエルの家よ。わたしが事を行うのは、あなたがたのためではなく、
あなたがたが行った国々の間であなたがたが汚した、わたしの聖なる名
のためである。（※神の動機=世界離散したユダヤ人たちが汚した聖なる名のために）
- 25 わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがた
はすべての汚れからきよくなる。わたしはすべての偶像の汚れからあな
たがたをきよめ、
- 26 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。
わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心
を与える。（※石の心⇒肉の心。すなわち、柔らかな心のこと）
- 27 わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟に従って歩み、
わたしの定めを守り行うようにする。
- 28 あなたがたは、わたしがあなたがたの先祖に与えた地に住み、
あなたがたはわたしの民となり、わたしはあなたがたの神となる。

3. 「光を昼、闇を夜」 ⑦

●ここに、神のわざが現わされる「昼」があります。「トーフー・ヴァーヴォーフー」の状態から、「きよい水」と「新しい霊」がミングリングすることによってなされる神のわざ、これが新しく生まれるということです。この神のわざなしには、「だれも神の国を見ることはできない」のです。イスラエルはまだこの新生には与っていません。「後のものが先になる」とあるように、新生の恵みはまず教会に授けられました。

●律法の教師であったニコデモは、そのことが預言されていたにもかかわらず、正しく理解できませんでした。彼は完全に肉に支配され、闇=夜の中に支配されていたからです。しかし御子イエシュアはこう言われました。

【新改訳2017】 マタイの福音書5章17～18節

17 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っ**て**はなりません。

廃棄するためではなく**成就するために来たのです。**

18 まことに、あなたがたに言います。天地が消え去るまで、**律法の**
一点一画も決して消え去ることはありません。**すべてが実現します。**

3. 「光を昼、闇を夜」 ⑧

●創世記1章は、神の栄光ある救いのみわざとは、かくあるものだとする預言的告白です。それは歴史の中で何度も繰り返されながら、救いの究極が「トーヴ・メオード」(תּוֹב מְעוֹד)となる新しい創造を目指しているのです。

【新改訳2017】イザヤ書65章17～19節

- 17 見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。 (=まことに見よ、わたしは創造する者)
先のことは思い出されず、心に上ることもない。
- 18 だから、わたしが創造する(ところの)ものを、いついつまでも**楽しみ喜べ**。
見よ。わたしはエルサレムを創造して**喜び**とし、その民を**楽しみ**とする。
- 19 わたしはエルサレムを**喜び**、わたしの民を**楽しむ**。
そこではもう、泣き声も叫び声も聞かれない。

●「先のことは思い出されず、心に上ることもない」とは、革新的創造がなされるという意味です。「先のこと」とは「古い天と地」です。神による新創造は創世記1章1節においてすでに預言されています。そして「喜びと楽しみ」(「マソース」שִׂבְּחָהと「ギーラー」גִּילָה)は、基本的にはメシア王国の基調なのです。

3. 「光を昼、闇を夜」 ⑨

●メシア王国には、多くの「夕があり、朝があった」の後に来る最後の「昼」が啓示されています。以下の「その日」とは「メシア王国」の到来を意味します。

【新改訳2017】ゼカリヤ書14章4～9節

- 4 その日、主の足はエルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山はその真ん中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ、残りの半分は南へ移る。
- 5 . . . 私の神、【主】が来られる。すべての聖なる者たちも、主とともに来る。
- 6 その日には、光も、寒さも、霜もなくなる。＝「その日には光がなく、輝くものは退く」
- 7 これはただ一つの日(תִּהְיֶה יוֹם אֶחָד)であり、その日は【主】に知られている。
昼も夜もない。夕暮れ時に光がある。
- 8 その日には、エルサレムからいのちの水が流れ出る。
その半分は東の海に、残りの半分は西の海に向かい、夏にも冬にも、それは流れる。
- 9 【主】は地(אֶרֶץ)のすべてを治める王となられる。
その日には、【主】は唯一(אֶחָד)となられ、御名も唯一(אֶחָד)となる。

4. 「夕があり、朝があった」①

● 「夕がある」とは「夜がある」ことの始まりを示すことばです。「夜」とは光なき世界であり、「空の空」の世界です。そこには希望を見ることがなく、その究極は、以下に見るように「死」へと向かう道です。

【新改訳2017】箴言14章12節

人の目にはまっすぐに見えるが、その終わりが死となる道がある。

●多くの者が人生半ばで、自ら死を選んだとしてもおかしくない「暗やみ」があります。しかし「夕があっても、朝がある」のです。「朝」（「ボーケル」^{אֶרְבֵּב}）があるとは「昼」があるということです。そしてその「昼」とは「神のわざが現わされる」ときです。

●創世記32章のヤコブのペヌエル経験には、夕から朝への流れのうちに神の創造的な取り扱いが記されています。ヤコブは神と顔を合わせたにもかかわらず、死ぬことがなかったばかりか、イスラエルという名に改名されたのです。それは何を意味するのでしょうか。

4. 「夕があり、朝があった」②

【新改訳2017】創世記32章22, 24～31節(新共同訳は22節が23節になっています)

22 その夜、彼は起き上がり、二人の妻と二人の女奴隷、そして十一人の子どもたちを連れ出し、ヤボクの渡し場を渡った。

24 ヤコブが一人だけ後に残ると、ある人が夜明けまで彼と格闘した。

25 その人はヤコブに勝てないのを見てとって、彼のももの関節を打った。

ヤコブのももの関節は、その人と格闘しているうちに外れた。

26 するとその人は言った。「わたしを去らせよ。夜が明けるから。」ヤコブは言った。「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださらなければ。」

27 その人は言った。「あなたの名は何というのか。」彼は言った。「ヤコブです。」

28 その人は言った。「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。

あなたが神と、また人と戦って、勝ったからだ。」

29 ヤコブは願って言った。「どうか、あなたの名を教えてください。」すると、その人は「いったい、なぜわたしの名を尋ねるのか」と言って、その場で彼を祝福した。

30 そこでヤコブは、その場所の名をペヌエルと呼んだ。

「私は顔と顔を合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた」という意味である。

31 彼がペヌエルを通り過ぎたころ、太陽は彼の上に昇ったが、彼はそのもものために足を引きずっていた。

※ 「足を引きずる者」 = 「イスラエル」のたとえとなった(ミカ4:6, 7、ゼパニヤ3:19)。

4. 「夕があり、朝があった」 ③

●イスラエル(「イスラーエール」 לְיִשְׂרָאֵל)の「エール」(אֵל)は「神」を意味します。その前にある「イスラー」は動詞「サーラル」(לְרַשַׁת)の未完了形。「サーラル」(לְרַשַׁת)は「支配する」という意味。したがって「イスラエル」とは「神が支配する」という意味で、ヤコブは恐れから解放されたのです。

【新改訳2017】イザヤ書40章3～4節

3 荒野で叫ぶ者の声がある。「【主】の道を用意せよ。

荒れ地で私たちの神のために、大路をまっすぐにせよ。

4 すべての谷は引き上げられ、すべての山や丘は低くなる。

曲がったところはまっすぐになり、険しい地は平らになる。

●「曲がったところはまっすぐになり」(וְהָיָה הַעֲקָב לְיִשׁוּר)とは、

①「ハーヤー」(הָיָה)動詞「なる」②「ヘアーコーヴ」(冠詞+עֲקָב)③「レミーシヨール」(前置詞+יִשְׁוֹר) ※つまり、曲がった「ヤコブはまっすぐになった」(預言的完了形)。なぜなら、ヤコブはイスラエル、すなわち「神が支配しておられる」からです。

4. 「夕があり、朝があった」④

● 「夕から朝へ」というリズムは、「苦しみから解放へ」「暗闇から光へ」「死から復活へ」のリズムです。それは「トーフー」かつ「ヴォーフー」の状態から救出・解放・回復されるという神の創造なのです。

● 一日が夕暮れとともににはじまるというヘブル人の時間感覚は、そもそも神の創造のリズムに裏打ちされているのです。彼らの歴史認識においても、また物事や生活のすべての領域においても大きな影響を与えています。特に詩篇がそうです。詩篇に「夕から朝へ」というリズムは、以下のように多くの例を見ることができます。

(1) 詩篇30篇5節

「夕暮れには涙が宿っても、朝明けには喜びの叫びがある。」

(2) 詩篇30篇11節「嘆きを踊りに変えて・・・粗布を解き喜びをまとわせ」

(3) 詩篇84篇6節「涙の谷を・・・泉の湧く所とし」

● 特に詩篇は、**終末論的希望に満ちた歴史観によって書かれている預言書**とも言えるのです。

今回のまとめ

● 第一日である創世記1章2～5節は一つの大きなフォルダです。その中に第二日から第六日までの各フォルダが入っていると言えます。「夕があり、朝があった」というフレーズは創造の第六日で終わっており、第七日にはそれがありません。ということは、神の創造の完成においては、「夜」がないということを示しています。つまり、創世記1章は、2節の「その地」が「トーフー・ヴァーヴォーフー」である死と暗やみの「夜」から始まり、朝を経て究極的には「昼」で終わっているのです。それはヤコブのペヌエル経験と同じように、創造のみわざにおける神のご計画が啓示されているのです。

● 「夜」から「昼」へ、「闇」から「光」へ、これは神の創造のリズムなのです。